

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	大沢啓徳
論文題目	「永遠の哲学」へ向けて—ハイゼンベルク量子力学の世界像によるヤスパース形而上学の基礎づけと限界—
<p>審査要旨</p> <p>論文の構成：</p> <p>I. 序</p> <p>II. 予備的考察（1. 本論の試みに対するヤスパース哲学研究一般の側からの批判に対する弁明 2. 本論の試みに対する科学の側からの批判に対する弁明 3. 人格と事柄をめぐって）</p> <p>III. 量子力学の根本原理（1. ニュートン力学から量子力学へ 2. 不確定性原理 3. 相補性の概念 4. 観測行為の意味 5. 自然の要請としての量子力学）</p> <p>IV. ハイゼンベルクにおける量子力学の世界像（1. 「誤った哲学」がもたらした先入観について 2. 無限分割の幻想とエネルギー一元論 3. 独断論的リアリズムと実践的リアリズム 4. 独断論的リアリズム批判の諸例 5. 生命の問題 6. 人類の統一の場 7. ハイゼンベルクの芸術観 8. ハイゼンベルクのゲーテ色彩論解釈 9. ハイゼンベルクにおける神の概念 10. ハイゼンベルクにおける実践の意味）</p> <p>V. 量子力学の世界像によるヤスパース形而上学の基礎づけ（1. 主観 - 客観 - 分裂 2. 二つの次元の平行 3. 世界の透明性 4. 生であり萌芽としての存在＝超越 5. 原初の創造 6. 想起と瞬間 7. 本来の現実と可能性 8. 現実的実存と可能的実存 9. 自由と必然 10. 贈与と不死性 11. 形而上学的な罪 12. 実存的交わり 13. ヤスパース実存概念の難点 — 形相として実存を解釈する試み 14. 暗号文字の解読(1) — 暗号の性格 15. 暗号文字の解読(2) — 存在経験 16. 暗号文字の解読(3) — 超越の三つの言語 17. 実践的リアリズムの遂行としての「つつむもの」論 18. 独断論的リアリズム批判としての精神分析批判 20. 理性 21. 永遠の哲学と哲学的信仰）</p> <p>VI. 量子力学の世界像によるヤスパース形而上学の基礎づけの限界（1. ゲーテ解釈における両者の差異 2. 挫折と例外者 3. 内的行為）</p> <p>VII. 結語</p> <p>本論文は、実存哲学の第一人者カール・ヤスパースの形而上学（これは彼の哲学の最終部門を指す名称であると同時に彼の哲学全体を性格づける言葉でもある）を、物理学者ハイゼンベルクの量子力学の世界像によって基礎づけようとする極めて斬新な試みである。その試みに対してヤスパース研究、広くは哲学研究一般の側からも科学の側からも批判が提出されるであろうことを十分に予想した上で、論者はあえてその試みによってヤスパース研究の新たな視野を開こうとする。物理学的世界の究極を求めて行き着いた極微の領域はわれわれの経験的世界（現存在の世界）とは全く次元を異にする世界であり、その「最奥の領域」、「中心領域」が、ヤスパース哲学が向かう形而上学の領域と重なるという解釈が本論文のモチーフになっていると思われる。これは内在と超越という問題に新たな深みと視野を与えるものだという評価がある審査員からあった。すなわち内在と超越を二つの異なる世界と見るのではなく、一つの世界の二つの相ないし次元と見るということであり、超越的世界は遠い彼方の別世界ではなく、客観化できないにせよある仕方では内在的世界とつながっているということである。これはすでにカントによっても示唆されていることであるが、その点を主題的に問い直すことにより、現代の物理学的視点から内在超越問題を再検討する手がかりが与えられ、より緻密な認識論的議論を展開する可能性がある」と指摘されたわけである。</p> <p>さて以上の論者の解釈の根拠はハイゼンベルクが提唱した「不確定性原理」に求められる。素粒子のレベルでは光による観測自体が対象の位置を確定不可能とし、したがって通常の客観的な現実把握が不可能</p>	

となる。このミクロの世界における認識不可能性に、自由の可能性を、そして形而上学成立の可能性を重ね合わせることは、内実上はともかく形式上はひとまず認められてもよいであろう。ハイゼンベルクが単なる物理学にとどまらずに哲学的教養と芸術や宗教に対する豊かな感受性をもつ研究者であり、根源の現実としての流動するエネルギーのうちに神を見ようとする「量子力学的世界像」を提示していることから、それとヤスパーズ形而上学との、さらには広く科学と哲学との接点あるいは共通領域を求める論者の意図は理解できる。論文の中心部分をなすと言える最長の第Ⅴ章は、そのような観点から、量子力学的世界像と関連させつつヤスパーズ形而上学の基本的諸概念を分析して、少なくとも可能性として科学と両立する形而上学を基礎づけようとする精力的な努力を示している。審査員にとってもこの部分は強く関心を引く内容を有し、審査において多くの活発な質疑がなされた。賛否両論含めて多くの議論があったが、「論者の試みはこれまでに無いものであり、ユニークで野心的な試みであって、これまでになかったヤスパーズ研究の新たな境地を開く可能性を秘めている」という点では審査員全員の意見は一致している。とりわけ、「主観 - 客観 - 分裂」を超える方向が科学の側にもあるということ、科学の背後にある宗教的・形而上学的なものを思わせる「中心領域」・「最奥の領域」、「高次の世界」との結びつき、「懐かしい故郷」への帰還というハイゼンベルクの宗教的・形而上学的体験、その「実践」的な意味、等々を指摘する論述は、ヤスパーズの形而上学との親近性を感じさせ、審査員たちの意識を強く刺激したものである。加えて、「創造の秘密に預かること」、「高潮した瞬間」、(根源において経験された出来事の)「形而上学的な想起」、「本来的な現実」、「不死性」、「形而上学的罪」等々のこれまでの研究では主題化されることがあまりなかったテーマに光を当て、論じている点は十分に評価される。

しかし本論文は従来にはない斬新な挑戦の試みであるため、公開審査会では様々な質問、指摘がなされた。特に本論文はややもするとハイゼンベルクの量子力学理論そのものと、ヤスパーズの形而上学との直接的対応関係をテーマにしたものと受け取られる恐れなしとしないが、論文題目にあるように、ハイゼンベルクの量子力学的世界像、すなわちハイゼンベルクの語る量子力学的言説に見られる論理的関係構造と、ヤスパーズ形而上学に見られる論理的関係構造が対応していることに基づき、そのアナログ的同一を扱ったものである。

しかしそういった方法論の説明が必ずしも十分になされているとは言い難く、アナログ的コンセプトの立場をもっとはっきりとさせるべきであった、という指摘がなされた。またヤスパーズ哲学の訳語についても、提唱する新訳語の是非、不適切な訳語の指摘が2, 3 なされた。こうした再考を要する点はあるものの、公開審査での活発な質疑が証左しているように、本論文は研究者を前向きに刺激する生産的要素を多分に含んでいる。また今日におけるヤスパーズ研究の成果も踏まえており、従来のヤスパーズ研究にない分野を開拓するものとして、本論文は高く評価できる。

よって審査員は、本論文が課程博士論文に十分値するものと判断する。

公開審査会開催日	2010 年 9 月 10 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		佐藤真理人
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士（文学）早稲田大学	田島照久
審査委員	鎌倉女子大学教授	哲学博士（バーゼル大学）	福井一光
審査委員	玉川大学准教授		中山剛史
審査委員			